



第40回日本毒性病理学会総会及び学術集会
2024年1月23日（火）12:35 - 13:25 大会議室
ランチョンセミナー概要

会社名

株式会社新日本科学
Shin Nippon Biomedical Laboratories, Ltd.

タイトル

INHAND-Minipig Reviewと
ミニブタの毒性病理学研究

演者

北里大学獣医学部 獣医病理学研究室
川口 博明 教授

座長

新日本科学 安全性研究所 病理研究部
小林 欣滋

要旨

2008年、毒性病理用語・診断基準国際統一化事業International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND) Projectは、北米 (STP)、英国 (BSTP)、ヨーロッパ (ESTP)、日本 (JSTP) の合同プロジェクトで、ラット、マウスを対象に、全身臓器15器官に亘る腫瘍性および非腫瘍性病変の用語・診断基準について国際的に統一化を図る目的で発足した。これに続いて2013年にMinipig Working Groupも発足し、ミニブタの用語・診断基準の国際統一化が図られ、2021年1月にその作業が完了、国際学術誌「Toxicologic Pathology」にInvited Reviewとして掲載された¹⁾。このReviewは、非臨床安全性試験で使用されるミニブタの全身臓器でみられる組織病変を分類するための統一化された増殖性および非増殖性病変の毒性病理用語を提供し、さらに、カラー病理組織写真も掲載されている。掲載された病変には、自然発生病変、試験物質誘発病変、関連する感染性病変などが含まれている。また、本プロジェクトは様々な国の規制および科学研究組織の間で共通の毒性病理用語を提供するとともに、毒性学者や病理学者の国際交流の機会を増やすことに寄与している。

従来、大型実験動物としてイヌが最も多く研究に利用されていたが、近年、ヨーロッパ（2010年頃）や日本（2019年）でのブタの利用数はイヌよりも多くなった。その背景には、ブタは生理学的、解剖学的にヒトとの類似点が多いことが知られているが、その大きさに取り扱いの難があった。そこで、ミニチュア化されたミニブタ、ゲッチンゲン（デンマーク）、クラウン、マイクロミニピッグ（日本）などが開発され、生命科学に寄与している。

本セミナーでは、INHAND-Minipig Reviewを中心にミニブタの毒性病理用語および毒性病理学研究を紹介する。